



## ノバルティス・バイオキャンプ ～夢・挑戦・喜び

松本 正



2007年の初夏、ノバルティス ファーマ株式会社（以下、ノバルティス ファーマ）の知人から携帯にメッセージが残されていた。その内容は、世界から集まる学生に英語でビジネスプラン作成を指導する人（ファシリテーター）を探しているとのことであった。彼には、以前より横浜市立大学や大阪経済大学において、ベンチャー起業の模擬演習を行い、学生たちが普段とは違って生き生きとビジネスプランを作成していることを話した記憶があり、きっとそのことを覚えてくれていたのだろう。ただし、それは日本語の演習であり、英語で本当に彼らを指導できるのだろうか。国内を見渡せば、英語で演習指導できるビジネススクールの先生方も多くいるのではないかと一瞬戸惑いを覚えたが、ちょうど10年前の夏にスタンフォード大学ビジネススクールの夏季エグゼクティブコース（2週間）に参加した時の衝撃的な記憶が呼び戻ってきた。このコースは世界各国からエグゼクティブを目指すビジネスマンが応募し、2週間の間に30近いケースを読み込んで議論を戦わせるもので、普段日本語で生活している私は、完全に脳内グルコースが枯渇し、本当の意味で頭の中が真っ白になってしまったが、逆にコースが終了したときの爽快感とケースによる模擬演習の完全なとりこになってしまった。同時に、日本でもこのような教育があればよいなと強く願ったのであった。この思いと知人の期待に是非とも応えたいとの一心で、ノバルティス・バイオキャンプのファシリテーター役に応募させていただいた。なお、ノバルティス・バイオキャンプは、バイオテクノロジー分野において、グローバルに活躍できるリーダーシップのある人材の育成を通じ、世界各国のバイオ産業振興に貢献することを目的として、ノバルティスが毎年開催しているバイオビジネス起業ワークショップである。

### ノバルティス・バイオキャンプ2007

2007年は日本で国際大会が開かれる年であった。日本国内の準備としては、書類選考で選抜された参加者に対し、9月にオリエンテーションが実施され、参考図書など<sup>1,2)</sup>も事前に配布して本番に向けて心の準備をお願いした。一方、私も貧弱な指導で参加者の期待を裏切らないように、1ヶ月前より自分の気持ちをバイオキャンプモードに切り替え、当日のスケジュールを頭の中で何度

もシミュレーションして、国際大会に臨んだ。案の定、国際大会には各国の国内予選より選抜されてきた優秀な参加者が集まっていた。また、参加者は医学分野の学生だけでなくMBAの学生も参加していた。ビジネスプランを作成するワークショップはバイオキャンプ初日と2日目の午後が当てられ、最終日に仕上げの発表というスケジュールで行われた。参加者は、1チーム5人から6人で構成される8チームに別れ、初日のワークショップ開始時に準備しておいた課題を示し、各チームでの議論を開始してもらった。最初に会社名や役割分担を決める作業からスタートするのだが、どのチームも最初から熱い議論が始まり、さすがにみんな優秀な参加者であると感じると共に、どの参加者もみな真剣でこちらが手が抜けないと強く感じた。ここで作成するビジネスプランはあくまでも仮想的な会社であるが、その製品コンセプトの中にどれだけ魅力的なアイデアを組み入れることができるか、また社会のニーズに十分応えた内容になっているか、各チームの実力の見せどころである。日頃サイエンスに没頭している若い研究者にとって、ビジネスプランを作成することは初めてかもしれない。しかし、彼らが各グループに配布されたPCをフルに活用し、必要な情報を瞬く間に収集し、自分たちの製品コンセプトを固めていくのには驚きである。

各チームには2名程度の日本人参加者がいた。途中、メディアのインタビューがあり彼らは、「世界のトップレベルの参加者と英語で議論できるので、自分のステップアップのために参加した。」とか、「サイエンスをどのようにビジネスに発展させるか勉強したかった。」というようなコメントを述べていて、このようなビジネスプラン作成コンペに対する参加者の高い期待を感じ取ることができた。

また、ワークショップ初日と2日目には、ナノキャリア・中富社長、キャンパス・河邊社長ならびに菅沼副社長にも応援を依頼し、自社の紹介の後でバイオベンチャー経営者の立場でのアドバイスを各チームにしてもらった。

各チームも初日と2日目に作業の途中経過を発表し、徐々にビジネスプランに磨きがかかり、最終日の発表では本当に2日間で仕上げたのだろうかと思えるほど立派なビジネスプランを発表してくれた。おそらく2日目の夜

は徹夜に近い状態で仕上げたのか、表情にはやや疲れが見えるものの、自分たちの発表の番が来ると、皆生き生きと発表する彼らの姿を見て、若い人たちの無限の可能性を垣間見たと共に、彼らにその力が出せる場を提供する責任を一層強く感じた次第である。彼らには夢があり、挑戦するエネルギーを蓄えていた。ちょっとふたを開けてあげれば、後は自然にあふれてくる。

ノーベル賞受賞者のホロビッツ博士も彼の熱いメッセージを伝えるために、わざわざ米国から参加されていた。そのメッセージは「Joy of Science (科学する喜び)」であった。日々の観察の一つ一つに喜びを感じて欲しい。短い言葉であるが博士の科学する心の思いが凝集していた。

### ノバルティス・バイオキャンプ2008

本年は10月に香港で開催される国際大会に向けた国内選抜大会の意味合いで、8月下旬に2日間の日程で開催された。前年の国際大会と比較し、ワークショップに使える時間は初日の午後しかない。実際この時間内にビジネスプランは完成するのだろうか。一方、大会関係者は、前年の国際大会を経験しているので、ビジネスプランが粗末であれば一目瞭然に分かってしまう。そのために、今回はテーマをiPS関連として、参加者には1週間前にiPSに関係するテーマを用意していることを知らせ、事前学習をお願いした。

短い時間を補う目的から事務局の配慮で、前夜祭の途中からワークショップの時間を1時間取れたこともあり、初日の正式なワークショップ開始と同時に、各チームとも活発な議論が展開していた。中には、みんなが自分の主張をして、このチームは本当に時間内にまとまるのだろうかと思うチームもあったが、さすがそのチームにはそんなチームをまとめ上げる才能の持ち主が参加していて、瞬く間にチームをひとつの方向に導いてくれた。また、参加者の中にはiPS関連の論文やレビューを持参して、実にスピーディーに自分たちのチームの製品コンセプトや環境分析を開始したくれた。

時間的な制約はあったものの、今回もワークショップの途中でリブテックの中村社長に会社紹介をお願いして、参加者のビジネスプラン作成の参考事例としてもらった。やはり、実際のバイオベンチャーの社長の講演はプラン作成の示唆に富み、各チームとも早速、講演から得た知識を自分たちにプランに取り込んでいて、彼らの吸収力のすごさには本当に驚いてしまった。

今回は国内大会にもかかわらず、6名の留学生が参加したこと、国際大会の予選の意味合いもあり、前年の国際大会同様、ワークショップはすべて英語とした。時として、日本語が飛び出すチームもあったが、やはり英語

での会話能力向上も目的のひとつであり、すぐに注意をして、英語での議論に戻してもらった。普段、英語を使わない研究生活の中では、大変苦痛なことであると十分承知しているが、私がスタンフォードで味わった脳内グルコースをゼロにするまで脳に働いてもらう数日間を是非とも経験して欲しかった。また、そのことで脳が活性化され、英語での議論についていけるようになると信じている。

今回、3名の参加者が、昨年の国際大会からの連続参加で、さらにその中の一人は2006年から3年連続参加であった。そして、その連続出場の理由を聞いてみると「ここで優秀な参加者と共に議論し、一緒になって自分を高めたい。」とのことであった。私は、この自分への挑戦に喜びを感じる事がとても大切であると思っている。

### おわりに

若い研究者の方々がキャリアパスを考える時に、「夢・挑戦・喜び」を考えてみてはどうかと思っている。自分の理想の姿を夢みて、ひたすら挑戦する。そしてその挑戦そのものを喜びと感じて生きていくことが大切なのではないだろうか。ノバルティス・バイオキャンプに参加している若い人たちはまさに自分の未来に夢を持ち、その実現のために挑戦することに喜びを感じていた。彼らの真摯な姿を見た時、日本国内でこのような機会がもっと多くあれば良いと痛感した。大学の枠を越え、留学生も交えた「夏季インターカレッジ・バイオ・スクール」のようなものの設立が望まれる。ワークショップそのものは数日でも、その随所にちりばめた鍵を参加者は一つ一つ開けながらゴールにたどり着いていく。そして彼らが無事発表を終えた時、その順位に関係なく、テーマに挑戦してくれた参加者全員に自然に拍手を送りたくなると同時に、十分指導ができたろうかという不安に襲われる。しかし、この不安はここに来ている参加者であれば、自分の力で何かを掴んだに違いなく余計な不安かも知れない。

最後にこの拙文の締めくくりに当たり、ノバルティス・バイオキャンプのファシリテーターへの応募の情報をくださった渡邊敏文氏と未熟な私に重責を任せてくれたノバルティス ファーマ株式会社に深謝いたします。そして何よりも、優秀な参加者全員に深く感謝いたします。

- 1) Chesbrough, H.: *Open Innovation*, Harvard Business Scholl Press (2003).
- 2) 松本 正, 吉澤 学: バイオベンチャー成功の秘訣Q&A, 羊土社 (2002).